

クルーザー 第28回
熱風伝

文・写真=安藤 健(本誌)
report & photos by Ken Ando
(KAZI)

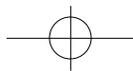
楽しく、優雅に、
オシャレがモットー

兵庫県・新西宮ヨットハーバー

関西ヨットクラブ 新西宮ヨットハーバーが主催するポイントレースは、毎回多くの参加艇を集めている。中でも、独自のハンディキャップシステムを採用したホワイトクラスは、ひととき盛り上がっている。その常連艇の一つが、クリスティナ・ロセッティだ。肩ひじ張らずに楽しむヨットライフを拝見しよう。

〈クリスティナ・ロセッティ〉

CHRISTINA ROSSETTI





非対称スピンを揚げて快走する クリステイナ・ロセッティ(ベネウ45F5) 優雅に、スマートに楽しむというチームのコンセプトには、ぴったりのフネだ



このチームでヨットを始める人も多いのが、ロセッティの特徴。チームのウェブサイトには、初心者用のレースマニュアルが掲載されており、自由に閲覧できる

千客万来、ホワイトクラス

全国各地で、さまざまなクラブレースが開催されている。それぞれにいろいろな趣向が凝らされているが、兵庫県の新西宮ヨットハーバーを拠点とする関西ヨットクラブ(KYC)のポイントレースも、さまざまなセーラーが楽しめるよう工夫されている。年間を通じてほぼ毎月開催され、IMSやORCといった通常のレーティングクラスに加え、J/24クラスやドラゴンクラスのようなワンデザインクラスも設けられている。

そんなKYCのポイントレースの中でも、特に独自性が強く、たくさんの参加艇を集めているクラスがある。「どんなヨットでも参加できる」というのがコンセプトの「ホワイトクラス」である。レーティング証書を持っていないフネだろうと、セール番号を所有していないフネだろうと、気軽に参加できる。色のついたレーシングセールはなくとも、ごく普通の「白い」セールでレースを楽しもうというものだ。独自のハンディキャップシステムが採用され、白いセールや固定プロペラ、ファーラーやスピネーカーのない艇、船齢の古い艇などには、ボーナスポイントが与えられている。

そこには、レース派、クルージング派というような垣根は存在しない。KYCのメンバーを中心に、多くのセーラーがヨットレースを楽しんでいる。そんなホワイトクラスの常連が、クリステイナ・ロセッティ(以下、ロセッティ)だ。

「ホワイトクラスは盛り上がってますよ。ウチみたいな重いクルージング艇(ベネウ45F5)でも、仲間とレースを楽しめるのだからたまりません。もちろんレースですから、みなさん真剣そのもの。参加艇の顔触れもさまざま

まで、中にはホワイトクラスを卒業して、ジャパンカップを制した友人もいます。ただし、我々は皆勤賞だけが自慢なのですが……」

と語るのは、代表オーナーの道満雅彦さん。「もともとはパーティー船だった(道満さん)というチームが、ポイントレースに定期的に参加することで、活動が活性化したのだという。その足取りをたどっていこう。

遊び心を持った大人のヨットチーム

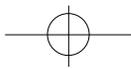
ロセッティの雰囲気がよく分かるエピソードがある。毎年8月に100艇近い艇が集まる、徳島の阿波踊りヨットレースでの出来事だ。

「参加93艇を集めた2005年は、なんと総合優勝。憧れだった真紅の大優勝旗を手にすることができました。そして、昨年(2014年)はしたたかに目標を変更、しっかり楽しんで、栄えあるタダヨロフィーをいただきました(道満さん)」

タダヨロフィーとは、本誌でもおなじみのマリニラストレーターのTadami氏がデザインしたトロフィー。レース期間中、もっともすばらしいパフォーマンスを見せたチームに贈られるものだ。ロセッティの面々は、ドクロ旗を掲げ、バンダナに口ひげの海賊スタイルでレースに参加、真っ黒な非対称スピンを展開した。

そんな遊び心を持ったロセッティの現在の主力メンバーは、3年ほど前から固まってきたものだという。とはいえ、道満さんの海との関わりは数十年を超えるし、英国の女流詩人、ロセッティの名前も歴史あるものだ。

「神戸で生まれ育ったこともあって、小さい頃から海への強い憧れがありました。17歳のときに客船でアメリカに渡って、その思いは一層強くなり、甲南大学に入学



後はクルージング部に入りました(道満さん)

卒業前にクラブはやめてしまったが、ヨットはそのまま続けた。ほどなく、大学の友人たちと一緒にディンギーを購入。社会人になってからも、BW21、ソレイユルボンと乗り継ぎ、海とヨットを中心とした仲間の縁は続いた。

そして1993年、道満さんを中心とした数人の仲間が出資し、初代 ロセッティ(ベネツウ41S5)が進水する。当時のメンバーはヨット経験者も多かったが、基本的にレースにはほとんど参加せず、屋形船状態で楽しむことが多かったそうだ。ソレイユルボン時代からのメンバーの一人である永井雅之さんは、次のように語る。

「たとえば、誰かがバングをもう少し入れようかと言っても、「そうだねえ」と言って誰も動かない。そんな雰囲気でしたから、今のチームは良い意味で変わったなあと思います」

道満さん自身、当時からヨットに対して一つの考え方を持っている。これは、現在も変わらない。

「ヨットは、僕たちにとって癒しと憩いの空間です。レースでさえも優雅に走れば、穏やかな気分になれるんです。だから、ウチのフネでは罵声や怒声が飛び交うことは絶対にない」

そんな大人のチームといえる ロセッティ が、活動にレ

ースも取り入れるようになったのは1993年、ホームポートを風光明媚な室津(兵庫県)から、新西宮ヨットハーバーに移した頃で、友人の勧めもありKYCのポイントレースに積極的に参加するようになった。

また乗りたくなる自由な空気

取材当日は、道満さんをはじめ14人のメンバーが集まってくれた。ディンギー出身のベテランもいれば、このチームでヨットを始めたという初心者もいる。女性が占める割合も大きい。

「今日集まったのは、いま最も熱心に活動しているメンバーです。なにしろメーリングリスト内の人数は40人近くで、関係者すべてを集めたら大変な人数になります」(道満さん)

年に一度、12月の週末に行われる「牡蠣パーティー」は恒例行事。メンバーの家族や友人も含めると、50~60人は集まる大イベントだ。クルー不足に悩む艇も多い中、何か秘訣はあるのだろうか。

「とくに勧誘活動はしていません。クルーによる紹介だったり、チームのウェブサイトを見てという人も少なくない。ウェブサイトはマメに更新し、写真をたくさん載せています。ヨットはなじみが薄いものだけに、初めての人



道満雅彦オーナー(54歳):ウィークデーは仕事に全力投入、休日は思い切り遊ぶという「ミスター・ロセッティ」。ヨット以外にもサクソフォンなど多彩な趣味を持つ。「ヨットなんだから、楽しく、優雅に、オシャレに乗りたいですよね」



油井敬助(53歳):中学、高校、甲南大学と道満オーナーの1年後輩で、30年来の長い付き合い。ボースンとしてチームをまとめる。初心者のクルーには、平日にもメールでヨット講座を開くという頼れる熱血漢だ



平本武志(53歳):同じ甲南大OBで、ヨット歴30年超のベテラン。ワッキーなどのレース艇で活動してきた後、2年ほど前にチームに合流した。「今の自分のペースが一番楽しめるのがロセッティ。すでに生活の一部になりました」



厚地則和(28歳):長崎総科大学付属高校でヨットを始める。社会人になってから、大学のOBの中島に誘われ参加。現在は鹿児島から通う。「大勢で乗るクルーザーは、ディンギーとは違う楽しみがあります」



永井雅之(54歳):慶応大学ヨット部出身。1990年、室津のソレイユルボン時代からチームに関わる古参。「オーナーの指示や命令ではなく、クルーたちが自発的に動くのがこのチームの特徴だと思います」



遊ぶときは思い切り遊び、やることはしっかりやる。ベテランと若手とが、とてもいい雰囲気がかみ合ったクルーザーチームだ



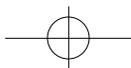
中島幸裕(43歳):長崎総科大学付属高校でヨットを始める。新西宮ヨットハーバーから徒歩5分の自宅は、週末ともなれば、チームの合宿所同然の状態。「今の自分からヨットを取ったら何も残りませんと」言い切る

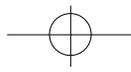


蜂谷尚士(40歳):ダイビングを趣味としていたが、約2年前に参加。「ロセッティでヨットを始めましたが、チームプレーが楽しい。今までヨットが続いているのは、やっぱり乗ったフネが良かったんだと思います」



町田肇(49歳):長くシングルハンドディンギーに乗った後、別のグループで艇を所有していた。3年前に遊びに行ったのがきっかけで、ロセッティへ。「適度に本気で、思い切り遊ぶという加減がいい」





クルーザー熱風伝



中田美香：長きにわたってマネージャーとして活躍してきた。「オーナーもクルーの声を聞く姿勢を持っていますし、フラットな空気がチームの特徴です。今のチームの雰囲気は、とてもいいと思います」



福崎 紫：プロの書家という顔を持ち、コンテストの副賞の「ヨットに乗れる賞」でロセッティに乗った。「ゲストでしたが、みんながやっていることのほうが面白そう。オーナーに頼み込んでクルーになったんです」



中野佳代子：ヨットは2年ほど前に始め、ロセッティのほか、28ft艇にディンギーと、週末は一年中必ず海に出る。「ヨットって本当に奥深い。だから、とにかく乗りたい！」と語るヨット大好きウーマン



KYCのポイントレースは、皆勤賞。7月1日現在で12レースを消化した2007年は、ホワイトクラスの総合成績で5位につけている



スマートに楽しむのは、ロセッティには、約2時間弱のセーリングを楽しむのが基本。取材の際には、約2時間弱のセーリングを楽しむのが基本。取材の際には、約2時間弱のセーリングを楽しむのが基本。取材の際には、約2時間弱のセーリングを楽しむのが基本。



濱口智重子：道満オーナーのジャズライブを通じて知り合い、昨年ロセッティへ。「初めて乗ったのが、ナイトレースだったんです。着る物もろくに持ってなかったし、寒かったなあ。でもハマってしまいました」



横尾 保(61歳)：26ftのヨットに加え、最速90ノットを誇るモンスターパワーボートも所有。「海外では日本のようなヨットとボートとの隔たりはない。道満さんは、そんな外国のヨットマンの雰囲気がある」



星野啓示(36歳)：関西転勤を機にロセッティに出会い、阿波踊りレースにも参加。「週末になると、必ずフネに人の気配があるというのはいいですね。同じKYCのワイレアのヘルムスマンを務める」

にも雰囲気より伝わるよう心掛けています」

さっそくウェブサイト(<http://www.c-rossetti.com/ryc1.htm>)をのぞいてみた。掲示板や写真アルバムといった基本的なものに加え、「プロモーションシネマ」と名付けられたショートムービーや、「乗船前心得」などがあるのは興味深い。また、秀逸なのが「ヨットレースマニュアル」。ヨット用語の解説はもとより、出港してレースに参加し帰港するまでの動作が、分かりやすく書かれている。初心者にとっては心強いアイテムだ。

また、ロセッティでは、船上でのポジションはあえて固定していないという。さまざまなポジションを経験することで、たとえ人が集まらないときにも3人いればセーリングできる。

「レースをやることで、漫然とフネに乗るのではなく、目的意識を持てるようになりました。毎年、KYCのポイントレースは、年間の予定が出ると同時に全レースにエントリーしてしまいます(道満さん)」

これは何も道満さんだけの感覚ではない。メンバーの多くも、実際に肌で感じている。

「レースで培ったことが、クルージングにも生きるんです。目的地に早く行けるようになるし、危ない状況に陥ったときでも素早く動けるようになる」

とは、ボースンの油井敬助さん。たしかにレースを通じて身につけた技術は、普通にセーリングしているときでも役立つものだ。

「もちろんレース一色に染まっているわけではありません。たとえば、友人の多い伊勢志摩方面、あるいは小豆島への長期クルージング。ときには、ジャズライブ(道満さんはサクソフォンが趣味)や、カクテルドレスで船上パーティーだってやりますよ。つまり、ヨットを使えばいろいろなことができるんですね(道満さん)」

そんな道満さんとクルーたちの間には、実にいい関係が築かれている様子だ。つい最近も、こんな出来事があった。

「レース中にジブシートが切れてしまったんです。すると、翌週には新しいジブシートがしっかりセットされていました。このサイズのフネだから、けっこうな金額だったはずですが、どうやらクルーたちがお金を出し合ったようです。一人一人が、自分たちのフネだという意識を持ってくれはじめているんだなあと思います」

と話す道満さんは満足そうだ。

「一年中、週末になると必ず誰かがフネにいる」というロセッティ。これからもスマートに、それでいて人の何倍も内容の濃いヨットライフを楽しんでいくはずだ。

